

熊本地震以降に建設されたバリアフリー型仮設住宅の計画の経緯と実際

キーワード：熊本地震 九州北部豪雨 仮設住宅
バリアフリー型 障害者・高齢者 車いす

石井研究室 相場 茉衣子
市川 悠

1. 研究の背景

東日本大震災（2011.3.11）では多くの仮設住宅が建設された。バリアフリーを意識した仮設住宅も建設されたが、実際には一般の仮設住宅の玄関にスロープを設置したのみで、特に車いす利用者にとっては困難な生活環境があった。これらのものをここでは「スロープ型仮設住宅」と呼ぶ。一方で、災害救助法に位置づけられるグループホーム型の「福祉仮設住宅」も建設された。これは、住戸内の各設備や空間が車いす対応の仕様となっているものだったが、一般の被災者向けというよりは、介護施設での被災者などが居住するものだった（表1）。

2016年4月14日に発生した熊本地震では、福祉仮設住宅は建設されなかったが、一般の仮設住宅として車いす対応が可能なバリアフリー仕様の仮設住宅が建設された。さらに2017年7月5～6日にかけて発生した九州北部豪雨でもバリアフリー型仮設住宅が建設された。

2. 研究の目的

熊本地震と九州北部豪雨では、阪神淡路大震災や東日本大震災で建設されたような特別仕様の福祉型仮設住宅ではなく一般の仮設住宅の中でバリアフリー仕様の住宅が、どのような背景と経緯によって建設されたのか。本研究では、バリアフリー型仮設住宅が計画・建設された経緯と現在び状況を明らかにすることを目的とする。

3. 調査方法

バリアフリー型仮設住宅が建設された熊本県益城町と、福岡県朝倉郡東峰村にて、建設の計画に携わった行政関係者（自治体および県）に対してヒアリング調査を実施した。さらには居住者にインタビューを行った。調査は2017年10月に2日間かけて実施した。

4. 調査結果

4.1 熊本の場合

熊本県で建設されたバリアフリー型仮設住宅は、玄関までスロープが設置されており、住戸内の玄関や浴室などにも段差がない。また、車いすでの生活を前提とし、出入口は有効幅800mm以上、浴室ユニットバスもゆとりのあるサイズ（1620）で作られており、キッチンや洗面台も低く、車いす利用が可能な仕様となっている。またコンクリート基礎で建設していることも特徴である。

車いすを使用するSKさんは姉と弟の3人家族で、震災後は避難所を転々としたが、一般仮設住宅への入居は困難として益城町に訴えていた。メディアを通して発信

表1. 仮設住宅のタイプと概要

名称	一般仮設住宅			福祉仮設住宅
	一般型	スロープ型	バリアフリー型	グループホーム型
対象者	全ての者	車いすは必要ないが足が不自由な者	障害者 車いす利用者	高齢者 障害者 日常生活上特別な配慮が必要な者
設備	一般の住宅仕様	一般の住宅仕様 玄関のみスロープ	段差の解消 車いす対応のスペース 引き戸 手すりの設置	スロープ 手すりの設置
便所、浴室 調理室等の設置	各住戸ごと	各住戸ごと	各住戸ごと	共同利用

し続けた結果、大きな反響があり、その結果、益城町から熊本県に要望が届き、検討されることとなった。熊本県は当初から高齢者・障害者などの仮設住宅の居住環境整備のあり方について検討しており、仮設住宅の10%には玄関スロープを設置することとしていた。そこに前述の要望が届いたことで、熊本県は内閣府によりバリアフリーを意識した仮設住宅建設の相談をした。その結果、益城町にバリアフリー型の仮設住宅6戸を建設することが決まった。具体的な対象者が明確で、戸数が少ないこともあり、これまでの災害史ではじめて一般仮設住宅において完全バリアフリー仕様の仮設住宅が誕生した。

居住者SKさんの居住後の評価としては、段差がないこと、スイッチの位置等が車いす対応になっていることに満足していた。一方で、室内の仕切りが十分できないアコーディオンカーテンや、玄関の引き戸が重いという点も挙げられた（表2）。

4.2 福岡県の場合

福岡県で建設されたバリアフリー型仮設住宅は、ほぼ熊本の型と同様だが、3DKタイプがあることと、基礎が木杭であることが大きく異なる。

福岡県東峰村のSSさん世帯は水害で自宅が半壊し、避難所に家族5人で避難していた。避難所で仮設住宅に関わる意向のヒアリングを受けた際、足が不自由であり、近い将来車いす生活になる可能性を伝え、バリアフリー仕様の仮設住宅を希望した。福岡県の仮設住宅建設担当者は、熊本地震のあと、熊本の視察にて一般仮設住宅の枠内で設定されたバリアフリー型仮設住宅の存在を確認していた。そのこともあり、また居住者の要望を受けた東峰村の要請を受けて、内閣府に相談し、バリアフリー型仮設住宅の建設が決定した。計画戸数が少なかったことで無理なく承認され、設置が決まったが、熊本県での前例が大きな意味を持ったと思われる。その後、朝倉市にもバリアフリー型仮設住宅を5戸建設した。

居住者SSさんは、仮設住宅での狭さや隣の家の音が気になる、また家族でそろって食事をとることが難しいなどの点を挙げた。また、バリアフリー型仮設住宅は車いす利用者を想定して作られているため住戸内の各所の仕切りがアコーディオンカーテンとなっていたり、トイレと脱衣所の間には車いすが移動や回転がしやすいように仕切りがないなど、家族で暮らす上でのプライバシーの確保に苦慮していた。しかし仮設住宅での暮らしは総じて生活は快適であるとの評価だった(表3)。

5. まとめ

これまでの災害では強い要望がありながらも実現され

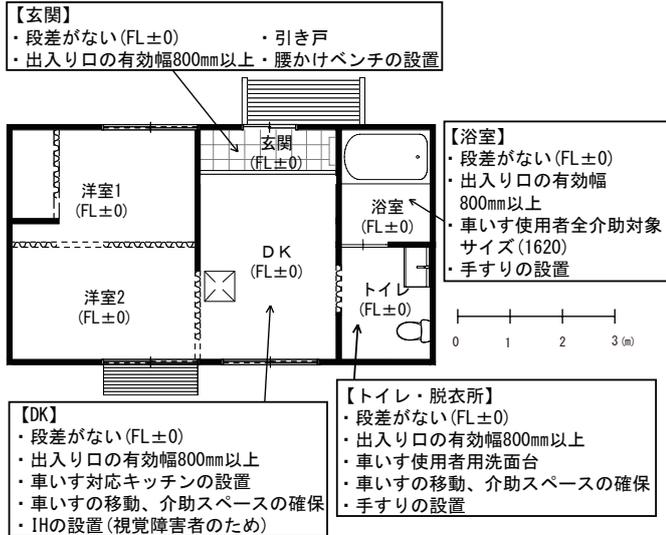


図1. 熊本県福富仮設住宅平面図

表2. 居住者インタビュー(熊本県福富仮設住宅)

居住者インタビューSKさん 男性(50歳代) 肢体障害で身体障害者1級 車椅子利用	
入居の経緯	
<ul style="list-style-type: none"> ・19歳の時に頸椎を損傷し、車いすを使用している。被災で自宅が全壊し、現在は姉と弟の3人家族。 ・被災後は学校や施設、病院等を転々としていた。一般の仮設住宅の住みにくさを町の行政に伝えていたが声は届かなかった。 ・しかし、その後もメディアを通して発信していると反響があり、町を通して県に要望が届き、動いてもらった。 ・最終的には、町が所有していた土地にバリアフリー仕様の仮設住宅を建てることが決まった。 	
仮設住宅の評価	
<ul style="list-style-type: none"> ○段差が無い ○電気の位置が車いすの高さに合わせてある ○トイレの広さが十分ある 	<ul style="list-style-type: none"> △アコーディオンカーテンでしっかり室を仕切ることができない △玄関の引戸が重い △洗面台の足元が車椅子と接触して使いづらい

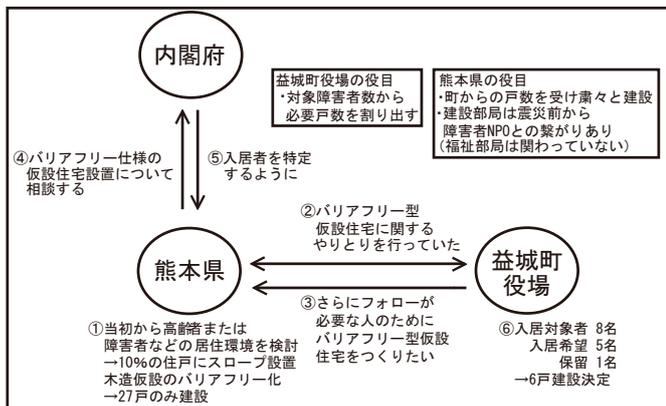


図3. 国(内閣府)、県(熊本県)、益城町の関わり

なかった一般型仮設住宅でのバリアフリーだが、今回の震災で数は少ないが熊本県に6戸、福岡県に2戸建設された価値は大きい。日本における仮設住宅の建設の歴史上、大きな進歩と言える。今回は戸数が少ないこと、想定される入居者が見えていたことで実現した。また、熊本県の前例が福岡県につながったとも言える。しかし、今回のバリアフリー型仮設住宅は通常の仮設住宅に比べると相当建設コスト(おもに設備関係)がかかるため、今後の災害において一般化していくかは不透明である。しかし、今回の事例は今後の災害においても参考にされ、また前例となって位置づけられていくことが望まれる。

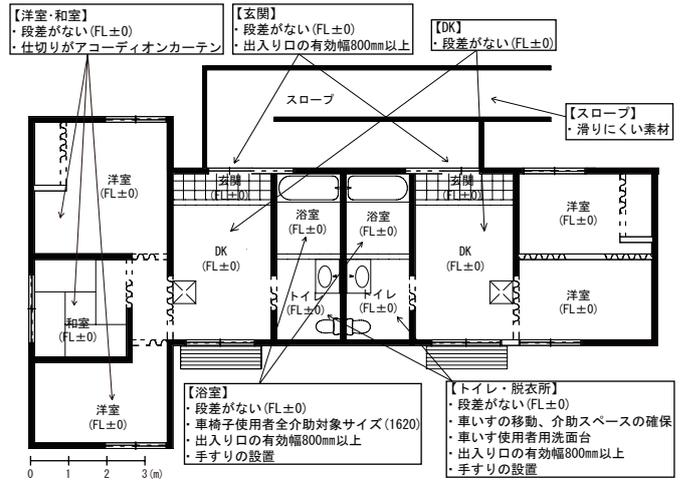


図2. 福岡県東峰村仮設住宅平面図

表3. 居住者インタビュー(福岡県東峰村仮設住宅)

居住者インタビューSSさん 男性(40歳代) (杖利用)	
入居の経緯	
<ul style="list-style-type: none"> ・集中豪雨で自宅が半壊した。現在は5人で暮らしている。 ・発災後は東峰村の特別養護老人ホームに避難。 ・現在は杖で生活しているが徐々に病気が進行して、2年以内に車椅子生活になると想定される。 ・現在は杖で生活している。 ・住宅修繕次第、仮設住宅を出て戻る予定。 	
仮設住宅の評価	
<ul style="list-style-type: none"> ○ペアガラスで発砲ウレタン断熱のため気密性が高い ○スロープが滑りにくくて安心 ○段差がなく家の中の移動が楽 	<ul style="list-style-type: none"> △狭いため食事は家族パラパラ △隣の家の音が気になる △仕切りがアコーディオンカーテン △スロープに屋根が架かっていない

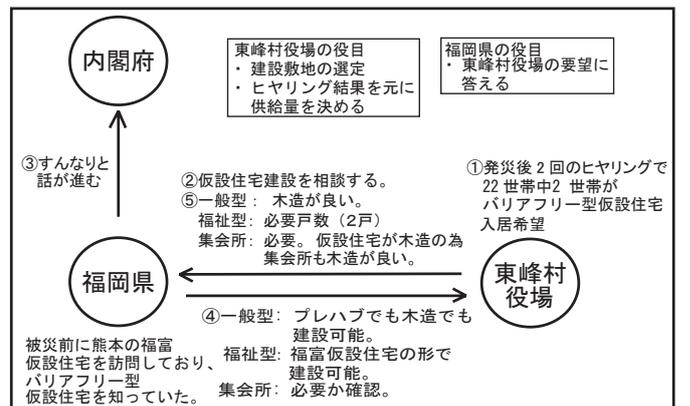


図4. 国(内閣府)、県(福岡県)、東峰村の関わり